

地域住民の障害児・者の受け入れと地域づくりに関する研究

大川眞智子 岩村龍子 杉野緑 梅津美香 松下光子 大井靖子 平山朝子 (大学) 安藤邦章
森島千里 吉田元気 (知的障害者更生施設羽島学園) 熊崎千晶 (生活サポートはしま) 横山郁代
柴田恵津子 小山美香 松本真理 佐藤沙夜香 服部寛子 (羽島市保健センター)

I. 目的

本研究は、地域の知的障害児・者世帯の援助ニーズ及び地域住民の中の障害児・者を受け入れていく素地を明らかにし、知的障害児・者と家族が安心して生活できるための地域づくりの方法を検討することを目的として、平成16年度から取り組んでいる。昨年度は、羽島学園(以下、学園)の活動の現状と課題を整理した。

今年度は、学園の地域交流を意図した取り組みに対する住民の認識を調べ、受け入れ状況を明らかにすることに加えて、知的障害児・者と家族の援助ニーズを把握することを目的として調査を実施したので報告する。

今年度の取組みによって、住民の認識や障害児・者と家族の実態を把握し、今後の支援策を協働で検討することは、現地側共同研究者のこれまでの活動を振り返ることになり、今後の実践活動の改善点を明らかにすることに寄与すると考える。

なお、本研究において、援助ニーズとは、把握した対象の実態や気持ち・考えなどから総合的に検討し、専門職者として援助が必要であると判断したニーズを意味する。

II. 方法

1. 地域交流を意図した学園の取り組みに対する住民の意識調査

1) A地区住民を対象にした訪問調査

(1) 対象; 地域交流新聞「あぜみち」を学園生と職員が長年にわたって戸別訪問して配布してきた、学園近隣のA地区住民

(2) 調査方法; 夏祭り参加を呼びかけるために学園生と職員(共同研究者を含む)がA地区を戸別訪問して「あぜみち」を配布するのに同行し、質問紙にて聞き取り調査を行う。

(3) 調査内容; 「あぜみち」を読む頻度・感想、学園行事への参加状況・感想、学園行事に参加しない理由、学園に対する気持ち・考え等

(4) 分析方法; 質問紙の調査項目毎に結果を整理し、学園の取り組みへの住民の参加状況や認識を明らかにする。

(5) 調査期間; 平成17年7月

2) 学園とA地区が共催する夏祭りの参加者を対象にした質問紙調査

(1) 対象; 夏祭り参加者

(2) 調査方法; 夏祭り広場にコーナーを設け、夏祭り参加者を対象に自記式の質問紙調査を行う。なお、対象に応じて、聞き取り調査とする。

(3) 調査内容; 住所・性別・年代、「あぜみち」を読んだことの有無、学園行事への参加状況・感想、学園関係のボランティア参加状況・感想、地域におけるボランティア活動の参加希望、参加できそうなボランティア活動の内容、学園との交流を深めるためのアイデア

(4) 分析方法; 質問紙の調査項目毎に結果を整理し、学園の取り組みやボランティア活動に対する住民の参加状況や認識を明らかにする。

(5) 調査日程; 平成17年7月30日

2. 知的障害児・者と家族の援助ニーズ調査

1) 知的障害者本人を対象にした訪問調査

(1) 対象; 市内のグループホーム及びアパート(単身)で暮らす知的障害者

(2) 調査方法; 対象と関わりをもっている現地側共同研究者とグループホームに訪問し、面接調査を行う。

(3) 調査内容; 性別・年齢・就業状況・健康状態、受診状況、日常生活の自立度・状況、社会的交流の状況、主な相談者、生きがい、今後の生活への希望・気持ち等

(4) 分析方法; 調査内容毎に結果を整理する。また、各調査者の判断した援助ニーズを取り出して、その内容を分類する。

(5) 調査日程; 平成17年7月4日

2) 知的障害児・者の家族を対象にした訪問調査

(1) 対象; 市内に居住し、知的障害児・者と同居する家族

(2) 調査方法; 対象と関わりをもっている現地側共同研究者と訪問し、面接調査を行う。

(3) 調査内容; ①知的障害児・者本人について; 性別・年齢、日中に通う場所、健康状態、受診状況、日常生活の自立度、介護状況、保健・福祉サービスの利用状況等

②家族について; 家族構成、健康状態、主介護者、

社会的交流（地域、親同士）、災害・緊急時の対応、主な相談者、今後の生活に対する思い等

（４）分析方法；調査内容毎に結果を整理する。また、各調査者の判断した援助ニーズを取り出して、その内容を分類する。

（５）調査期間；平成 17 年 7 月

3. 倫理的配慮

全ての調査は、研究の趣旨と目的を説明して了解の得られた人を対象に実施し、調査協力者のプライバシーを保護して匿名性を保障している。

4. 共同研究の取組み体制

調査の企画・実施、調査結果の検討は、各施設の共同研究者が協働して取り組む。特に、各調査の実施に関しては、各施設と実態や課題を共有するために、大学だけで行うのではなく、各施設の共同研究者と協働して行う。

Ⅲ. 結果

1. 地域交流を意図した学園の取組みに対する住民の意識調査

1) A 地区住民を対象にした訪問調査

（１）調査協力者；48 名

（２）調査結果

①「あぜみち」を読む頻度；毎回読む（27 名）、時々読む（7 名）、あまり読まない（1 名）、全く読まない（0 名）、不明 13 名

②「あぜみち」を読んだ感想；何の行事があるかわかる（5 名）、学園生の頑張っている姿がわかる（5 名）、学園はいろいろやっている（4 名）、楽しみにしている（2 名）、地域に溶け込もうとする努力がある、地域の人と交流していることが良くわかるし大変だと思う、学園は A 地区とよくつながっている等

③学園行事への参加状況；夏祭り（29 名）、バザー他（6 名）、参加したことない（4 名）

④学園行事に参加した感想；楽しい（7 名）、学園生が頑張っている（2 名）、学園の人が気軽に声をかけてくれる、小さい子どもがいないと行きにくい、昔は出店を出して参加していた等

⑤学園行事に参加しない理由；子どもが小さいときは参加していた、足腰が弱くなった、家族の介護がある等

⑥学園に対する気持ち・考え；学園生は町民運動会にも参加しているし地域との交流を頑張っている、近所の人から学園でのボランティアを誘われているが仕事が不規則で難しい、近隣に学園職

員が住んでいるので学園にも親しみを持っている等

（３）調査者の捉えた住民の反応；総じて受け入れがよく、調査にも快く協力された。特に、子どもが学園でボランティア活動をしていた人、学園でボランティア活動をしている本人は非常に受け入れが良かった。また、「暑いけど頑張ってる」と学園生や職員に労いの声をかける人が多かったが、中には、調査依頼の話をする雰囲気無く、「あぜみち」の受け取りのみの人もいた。

2) 学園と A 地区が共催する夏祭りの参加者を対象にした質問紙調査

（１）調査協力者；105 名

（２）調査結果

①住所；「あぜみち」を全戸配布している B 小学校区（学園所在）の居住者（44 名）、B 小学校区以外の市内居住者（41 名）、市外居住者（13 名）、不明（7 名）

②年齢；10 代（27 名）、20 代（4 名）、30 代（10 名）、40 代（13 名）、50 代（19 名）、60 代（17 名）、70 代（5 名）、不明（10 名）

③「あぜみち」を読んだことの有無；あり（53 名）、なし（50 名）、不明（2 名）

④「あぜみち」を読んだ感想；学園の地域交流の様子がわかる（32 名）、毎回楽しみにしている（19 名）、学園の祭り・バザーの日程を確認している（17 名）、何か行事に参加したい（11 名）

⑤過去に参加した学園行事；夏祭り（81 名）、バザー（33 名）、その他（20 名）

⑥夏祭りに参加した感想；楽しい（25 名；にぎやかで楽しい、出店が楽しい、子どもから大人まで楽しめる、家族で毎年楽しみにしている等）、A 地区の住民と一緒にできてよい（2 名）、学園生が頑張る姿に感動した（2 名）、大変よいことだ、よりいっそう頑張ってもらいたい等

⑦学園関係のボランティア活動経験の有無；あり（23 名）、なし（77 名）、不明（5 名）

⑧学園関係のボランティア活動の感想；学園生との親近感が深まる、心から素直になれる、子どもたちにも参加してほしい、少々大変だった、やりがいがある等

⑨地域の障害者・高齢者にかかわるボランティア活動への参加意志の有無；あり（77 名）、なし（21 名）、不明（7 名）

⑩参加できそうなボランティア活動の内容；文化・スポーツと一緒に楽しむ（40 名）、話し相手（22 名）、庭の草取り（12 名）、花の手入れ（12 名）、一緒に食事づくり（11 名）、一緒に野菜づ

くり（11名）等

⑪学園と地域住民の交流を深めるためのアイデア；一緒に畑をしているので続けると良い、中学校でいろいろふれあう、スポーツ活動を通して交流する、会った時に挨拶するとよい、夏祭りは楽しく交流ができるのでこんな会がもっと広がるように一人ひとりの意識も大切、学園と住民の交流はだいぶ深まっている等

2. 知的障害児・者と家族の援助ニーズ調査

1) 知的障害者本人を対象にした訪問調査

(1) 調査協力者；4名

(2) 調査結果

- ①年齢；30代（1名）、50代（2名）、60代（1名）
- ②住居；グループホーム（3名）、アパート（1名；独居）
- ③療育手帳；A（1名）、B（3名）
- ④日常生活；ほぼ自立（4名）
- ⑤就業；あり（3名）、なし（1名）
- ⑥治療中の疾患；あり（2名；心疾患等）
- ⑦健診の受診状況；職場にて受診（2名）、かかりつけ医にて受診（1名）、不明（1名）
- ⑧地域住民との交流；挨拶程度（4名）
- ⑨主な相談者；いる（2名；きょうだい、グループホームの世話人、生活サポートはしま）
- ⑩災害・緊急時の対応；聴取できず
- ⑪生きがい；あり（4名；カラオケ、写真撮影等）
- ⑫今後の生活への希望；結婚相手を見つけて助け合っていきたい、グループホームに住み続けたい、今の生活が続くと良い、わからない

(3) 調査者の判断した援助ニーズ

各調査者の判断した援助ニーズの内容を分類した結果、①健康生活への支援、②他者との交流支援、③災害時の対応確認の必要性が確認された。

2) 知的障害児・者の家族を対象にした訪問調査

(1) 調査協力者；5名（全員母親）

(2) 調査結果

A：知的障害児・者本人について

- ①年齢；10代（1名）、20代（3名）、50代（1名）
- ②日中通う場所；授産所（2名）、通所更生施設（1名）、養護学校（1名）、なし（1名）
- ③療育手帳；A（4名）、B（1名）
- ④疾患；あり（4名；心疾患、難聴、白内障等）
- ⑤健診受診；授産所にて受診（2名）
- ⑥日常生活自立度
 - ・食事；全介助（2名）、自立（3名）

・排泄；全介助（1名）、一部介助（1名）、自立（3名）

・清潔；全介助（2名）、一部介助（2名）、自立（1名）

・移動；一部介助（2名）、自立（3名）

・コミュニケーション；言葉ないが表情・感情表現あり（3名）、簡単な会話可能（1名）、会話困難（1名）

・保健・福祉サービス利用；デイサービス（2名）
B：家族員について

①主介護者；全員母親（健康障害あり2名）

②障害児者の親同士の交流；親の会加入（4名）

③地域住民との交流；あり（4名）、なし（1名）

④近隣に手助けしてもらったこと；あり（2名；本人の外出を教えてくれた、大事に育てるように言われた、子どもの頃一緒に遊んでくれた）

⑤近隣に手助けしてほしいこと；あり（3名；入浴介助、用事のある時に預かってほしい、交流する仲間がほしい、親の付き添いなしで子ども会に参加させてほしかった）

⑥近隣に理解してほしいこと；あり（1名；もっと本人に興味を持って見てほしい）

⑦介護者の主な相談者；あり（5名；親の会メンバー、関係機関職員、家族等）

⑧災害・緊急時の不安；あり（1名；知らない人が大勢いる避難所（中学校）に連れて行くと、食事しなくなることが心配。他の人に気を遣わないで済む福祉避難所のような場所に避難したい。）

⑨今後の生活への気持ち・考え；自宅で家族と一緒に生活したい、自分が世話をできなくなったら施設を利用するしかない、働く場や交流できる場がほしい、必要時にショートステイを利用して今の生活パターンを継続させたい、将来的には本人のきょうだいの世話になる予定、きょうだいなりに将来は本人の生活を支えていくことを考えている様子、親が元気なうちは良いが本人の収入が少ないので不安等

(3) 調査者の判断した援助ニーズ

各調査者の判断した援助ニーズの内容を分類した結果、①本人・家族の健康生活支援、②家族内の対応能力への支持的支援、③十分なアセスメント、④家族が理解できる情報提供、⑤本人・家族のニーズに応じたサービス利用体制の整備、⑥地域社会における就業・交流のための場の確保、⑦地域住民の障害児・者とその暮らしへの理解、⑧災害時の対応や避難に関する不安への支援が確認された。

3. 今年度の共同研究の取り組み体制

現地側の共同研究者にとって、今年度の取り組みの良かった点として、「一緒に訪問調査することで課題を共有でき、今後につながる動きになった」、「実際に訪問し、時間をかけて聞き取りが出来たことで、より深く知ることが出来た。地域に足りない部分、地域性とも捉えられる風習が把握できた。」「研究対象の実態を把握することにより、今後の支援対策・改善策に結びつけることができた」が、あげられている。今年度の取り組みは、障害児・者と家族を支えるための連携した支援活動体制づくりの一環であり、地域づくりの第一歩であった。

一方、共同研究者全員が研究の趣旨・目的を十分共有できないまま、調査が進行してしまった。また、調査データの集計・分析に時間がかかり、調査終了後にタイムリーな検討会を開催することができなかった。

IV. 考察

1. 学園の取り組みに対する住民の受け入れ

A地区の訪問調査の結果から、地域交流を意図した学園の取り組みは住民に理解されており、肯定的に受け止められていることが伺える。これは、戸別訪問による「あぜみち」の配布や夏祭り等を通して、A地区住民との関係性を大事にした今までの活動の成果であると考えられる。また、A地区の住民を学園のボランティア活動に巻き込んでいったことも、住民の学園に対する理解を自然に深めていったと思われる。

2. 世代をこえた理解の深まりに向けた働きかけ

A地区住民で子どもが学園でボランティアをしていた方は、学園生の戸別訪問に対して非常に受け入れが良かったことから、子どもの肯定的な受け止め方は家族員の認識・受け入れに大きな影響を及ぼしていると考えられる。ボランティア活動や交流行事で感じたことを家族員に伝えていくよう子どもに促したり、子どもの感想・学びを整理して、家族員や他世代へ意図的に伝えていく働きかけは、地道ではあるが他世代の価値観づくりであり、肯定的で自然な受け入れを促していくと考える。

また、夏祭り参加者には地元の中学・高校生の姿が多く、保護者の出店参加も見受けられた。今後、学校等と連携して子どもと親世代の価値観に働きかけていくことも地域づくりとして重要と考える。

3. 知的障害児・者と家族を支えるための連携した支援活動体制づくり

援助ニーズ調査の終了後、共同研究者が一堂に会して、今後の支援策を検討した結果、①対象家族への調査結果の報告や自治会長・民生委員・関係機関への働きかけ、②事例分析による療育支援の見直し、③障害児・者の家族が活用できる社会資源マップの作成、④災害時の対応に関する地域での取り組み支援が必要であることを確認した。

この話し合いの中で、障害児・者の親同士のインフォーマルなつながりが強く、その中で情報交換しているが、専門職者に頼らず問題を解決している実態があるのではないかと、という意見が出てきたことから、親同士のインフォーマルなグループへのアプローチが必要と考えられる。また、家族が必要としている情報を提供するだけでなく、支援する側が家族にとって必要だと判断した情報を的確かつ慎重に提供していくことが重要であると考えられる。

調査後の話し合いは、実質2回しか行っておらず、今後の支援策を十分に検討できるまでには至らなかったが、障害児・者本人と家族の実態に基づいたディスカッションができたと考える。今年度は、各施設が協働して調査に取り組むことができたことから、まずは互いの職務内容を理解することにつながった。また、障害児・者本人と家族に対して一貫した連続性のある援助を行なうために、連携した支援活動体制づくりに取り組む必要性があることを共同研究者間で共有することができたと考える。なお、今回の取り組みを通して、支援する側の専門職者である共同研究者同士がつながり、理解しあうことこそ、障害児・者と家族が安心して生活できる地域づくりの一環であり、重要な意味を持つと考える。

V. 共同研究報告と討論の会での討議内容

当日は、貴重な意見を伺うことができたので、その概要を報告する。

参加者からの質問があったので、共同研究者である学園の支援員から、学園の地域交流を意図した今までの取り組み（「あぜみち」の配布、A地区住民のボランティア活動としての学園での食事づくり、A地区住民と一緒に芋栽培、大学生のボランティア活動の積極的な受け入れ、一緒に喫茶店やプールに付き添う形での本学学生のボランティア活動等）が紹介された。

また、A地区住民である参加者から、「あぜみち」は、よく読んでいた。学園のことは、家族の

中でも話題になる。小・中学校で学園との交流もあったので、一住民としては、学園が地区内にあること自体、普通なことと思っている。自然な感じ。特別な施設というわけではなく、お隣さんという感覚。」という発言があった。学園は住民の中にごく自然に存在しており、住民にとっては既に生活の中に馴染んでいることなので、改めて受け入れるという感覚ではないということを実感させられる発言だった。

参加者から、地域住民同士の結びつきが薄くなってきている現代において、過剰な個人情報保護により、地域の中で助け合うことがままならない現状を危惧する意見が出された。また、共同研究者である保健センターの保健師から、行政として、個人情報の取り扱いの難しさについて意見が述べられ、地域づくりを検討する上で重大な課題であると考えられた。

また、知的障害児・者の母親の援助ニーズ調査に関して、「母親が求めているのはサービスの充実であって、地域づくりではないのではないか。」という参加者の意見があった。その意見に対して、筆者なりに地域づくりの考えを述べたが、地域づくりで何を指すのか、何を持って地域づくりと言わんとするのか、地域づくりが障害児・者と家族や地域住民にとってどういう意味を持つのか、地域づくりに取り組む必要性は何なのか、自分自身の中で不明瞭だったため十分な説明をすることができなかった。

なお、他の参加者から、障害児・者の家族が近隣社会から孤立して生活せざるを得なかった歴史が今も影響を及ぼしていること、近隣への支援を望むことすら考えられない家族の現状がある故に、家族が望むことへの支援だけではなく潜在化した真のニーズを明らかにして対応していくことが大切である等が述べられた。

今回の討議では、当初予定していた内容（住民・民生委員・関係機関等と連携した障害児・者の地域支援体制づくりの方法）を深めるまでには至らなかったが、地域づくりを検討する本研究の枠組み自体が不明瞭であったことや、地域づくりや住民の受け入れについて、非常に独善的な固定概念で捉えていたことに気づくことができた。今回の討議を通して気づいた点を踏まえて、今後も真摯に取り組みたいと考える。

なお、今後は、研究の趣旨・目的を再確認することに加えて、そもそも地域づくりで何を指すのか、地域づくりはどのような意味を持つのか、地域づくりは各施設の業務にどのように位置づ

くのかを共同研究者が互いに納得できるまで話し合うことが必要であると考え。共同研究者が納得した上で、今回検討した支援策に取り組むことが大事である。また、共同研究者の役割分担を明確にして、研究進行をスムーズに行うことが重要であると考え。

【謝辞】

本研究の調査に快くご協力いただいた皆様に深く感謝申し上げます。